





形影夜話卷下

問患者以療すふ別に意哉用也なきもの何ぞ
 るる丸患者を療すふ別に難治此病哉治人と形むよる
 治すなき此病を難治ふなきものやふ心も無る一翁の
 先師恒小曰く療治一段もあと思ふより治を施す一
 初より深く進むるまを跡へて戻りかゝるものも教らま
 たりとぬ何れも老練の人此言葉なり元來醫理も疎なる
 とはゆる輕症も重症もあつてゆくものもあつて夫れ何れと
 之れに形體の事小疎きう逆も施治此誤なり譬て之
 くの患者の形體の敵國の地理なり乃ち山川もは險易何
 り高低ありぬ一これ地の定まりたる所あり然るに

徳信氏曰く



答

其地も常に異なるものあり必敵に謀計を設るべきあり
 人身に四肢百骸も定まらざる部位あり其自然のまゝに
 何れも必病むもの候なり固より望聞問切の四診の
 古より定まらざるものあり先此所如此なるべきものあり
 今や異なるものあり疑を起し能其状を考へて病
 を得るは日數を始め多く患者の年齢をも尋ね其疑
 ふ外も苦惱するものあり細密に問盡し從つて
 脈を切し已ら不審するものと斟酌し彼所如此の物有
 きよ今かくするものあり候ものあり候ものあり我意
 不決定する所出来たる上より方を處するべきものあり翁の
 少年の時先師西玄哲先生より向ひ癰疽の初發あれは

候ふも皆一點粟粒の如し此時如何とて輕重險易を見
 分つたりと問ひし先生唯何となく已ら頭上より壓せ
 らるる探るるものなりと云ふと冷く怖き極め大患に至
 るものなりと教へられたる是取留めべきやと云ふ言なま
 と彼場數を強し人の言葉なり今に至るまで毎時此言
 不感するものあり細薬の偏味もて各主功あるものあり謾
 に用ひまはる害哉招くことあり既に腹中へ入るに再ひ取去
 り候ふべきものなり必しを暴卒ふするものなり是を與ふ
 所見込に何れも他を顧みざるものあり假令に敵を破
 るる先陣を不伐し後陣を伐く勝を取るといふ如く
 發熱發渴頭痛等諸症ありと云ふれり拘はる下劑を

與へて利を得諸症一時に平愈するの類ありあり患者
 の病苦の何れなり此所彼所悩まきなきを醫者眼
 で見明し問ふなき所を問ひ盡し心も徹したるありて
 藥試與ふなきなり元より患者も傍人の醫事試み
 ざるも急種々無益の事試みはらぬものあり必し
 其言も迷ふるものあり然れども盡く其言を棄へきめを
 何れわれのま醫理も明なきは其まの内の心
 徹するも有る可取事のなきなり其取るなき事
 斗試取ま已り疑ふ所も参考へ治を施すなり如此す
 時の有誤るものあり阿蘭も頭痛を真假の二
 症も分つ假頭痛とい他所も毒ありて其為小頭痛する

なり故も其毒ありを攻む時頭痛自ら愈むもの真頭
 痛の毒頭脳中にありて此症の頭脳も就く單小其毒
 攻むるとき平愈すもの上るも取るなきも試取
 所あり阿蘭人の治を為すは道なり又此も可笑譬
 なま昔一人の大盗ありて下の小賊を多く持て
 或日春雨連日止は殊る寂寞なり時美味を欲せし
 より命一某の市某店に好き魚あり盜來ま
 といり小賊聞て誰彼行かふ番守ありて盜獲す皆
 空しくぬまるとなり次一人の小賊も命一其
 其跡も大盗他も向つて日彼ちを必盜ま來るなり汝等
 不才も急彼あり及ふといひり無程彼小賊大なる

鮮魚を提ち来まり大盗見く其小賊は向ひ彼店より
 前にあがり股引を云ひしを在ると答へし是を番
 守阿まで目指す魚の盗み得らまはりしを他所阿り
 股引は盗み取りしを賣拂ひ其價は以て買来まりと
 する醫の病を療するものゆゑ病源此所も阿りて却
 彼所も在ると阿り是等意を用ひるべきの事あり此他意
 用ひる事種々有る四時の氣候土地の寒暖に従ひて
 異事あるものと云ふ嘗て白石先生の南島志は讀しに
 薩州人曰本州の者琉球國へ在番も三年一度交代
 代為すあり其中ふい固より酒を飲事を忌惡もの
 を有るは然るも其人彼地も在る内の善く泡盛酒を飲し十

數鐘は勸與ふまきと辭せず北へ歸るは大島とふ所も至ま
 くと數鐘に堪はず本土もぬるも及んく喉を下すと能さる
 事初のぬしと云ふ天地斯人哉生し方物各宜き所有
 事と云ふ相傳ふ昔外國人有るありて曰此國南海瘴霧乃
 中も在る故も人必ず天死す因く此泡盛酒の製法は
 授けく其毒は避ふ志むるをありし考ふる小江戸に
 ても極暑の時の焼酎の受能く寒冷の時の飲まざるもの
 ありこれを思へば暑中の表氣開き裏氣冷へ寒中の表氣
 閉く裏氣熱くを見えり其後伊勢白子神昌丸船頭光太夫
 と云ふ者魯西亞國北邊へ漂流し松前迄海を江戸へ召歸
 させし時松前侯より護送の人數も加へらまはり其醫官

米田元丹といふ男一日草堂へ醫話ふ来り種々物語り此序
 我松前より参著の類功効得る病者少く硝黄の類にて
 効効得る病人多しといひ其坐は津輕の醫官樋口道泉と
 いふ男も居合ふ津輕さるゝ大躰それと同じき様ありと
 いふ又余り門人日向高鍋の醫官福崎大順萩原立章等
 り物語ふ我郷高鍋邊より假初の外邪は漫りに柴胡湯
 此類を與きは忽裏症に變り易といふ尤初より温
 温補の藥は少くさきは人誤ると多しとあり又植木屋
 といふ此木は是非枯さざるといふものの寒尿を貯置れば
 土は和し植む如此とてなり必枯さるとあり翁も箕
 輪の植木屋次兵衛といふ者大成椎木を植むを見し

此物効用多し其後行て見たる能植着る繁茂せり
 物皆如斯あれ治療者意を用ゆべきなり右ふ
 説は焼酎参著硝黄柴胡の類も土地の寒暖氣候より
 て人の腸胃に入ると功効立る所まひありあれ其土
 ふ在つていふ心得るなり又阿蘭説ふ形體不
 具の人と病よりつゝ龜背龜胸と成る類は臟象の位置
 を偏倚することありありある人の耳目ふと天稟大小
 ありていふ内象此物も生得不具なることも有るもの
 説置たり然るに今日施治の處此所なりといふ心用也
 事なり凡金瘡打撲折傷脱臼等より變りて腫瘍と
 ありたり格別他の外發諸瘍盡く内毒有るより根

さるものなる。其の故は内治の主ありて外治の客たるに
決て外治而已の事なる。何れも此の心付ざる時、人我誤る
る多し。外科といふも心を内外の二科に用ひべき。其最
なる所あり。

問 醫を業とするもの、藥方多く知る、以てよくとす
事なるや。 曰 否、藥方の所謂兵家軍器の如し。此物を知る

まは我のいあらひ、藥方を知らざるまは病を治するに能はざる
は固より論ず。然るも已に力に應せざる大成兵器を好
り如く、醫力のいあらひ、漫りに奇方異方、好む偏は是
れ貪り集る、無益の甚しきなり。奇方好む人の多く、醫
は鈍き輩と思はるるあり。古へは弓長刀太刀、斗あぐ軍は

せり。るあり。其後鎗といふもの出、又鉄炮といふ物出来、
格別軍の功者となりたれと、軍の勝敗小至りて、大將の氣
量小よるを、この方の奇なる、好事の何、きまはあはれ、
奇方多く知りたる、斗あぐ用ひる力なき時、は何の用も
立ず。石火矢の小筒より強力の器なきと、是をく、軍の
なれぬと、あはれ、火術知らざる古小齊、
田單の火牛の策、或は工支、大利或得、其の何れ軍理、
知ら其志所切なる、人の奇計も出、其の事、場合
を知る、料理、或は塩梅、或は假令、
料理の如何、可宜と問ふ、魚菜、其に形、能く切、酒
酢味、醬油、調和、煮、生、用ひ、

りのて然る料理とありきありや只煮方塩梅とあり
 よて美も悪くもなるものなり塩梅の何き時を食ふの
 意は適とす又塩梅美きとて出づ場のたんを考へ勸
 ざる時は腹合の應せず無興あると同事なり酔後すむ
 べき然坐付に供し坐付すむべき然酔後に供する時大
 に人意を損するものなり方の獻立なり療治の塩梅なり
 来客の人品を知り設たる執ちあるべき能執ちありあ
 ず患者の病症所因數多の機會然るる療治あるべき
 人の療治よ非ず醫然るなり方然貪り好人より療治の
 塩梅然得るを第一とせし又藥の單方に功あり多味の
 功ありといふ人尙尤仲景なるの方の多味なるは少くして

皆奇効あり方ともあれ又多味なれとて悉く功あり
 小の何なるもの都て藥の調合の妙ありものなり多味
 合して一能然るなりをいふはなり兵家小用ゆる火藥
 を焰硝硫黄灰を一味と分つて甚しき物より五分
 量を正し調合する時をいふは猛烈なる物なり朱砂を
 て性烈なるもの少何らされとも水銀とより輕粉とありては
 其力甚しきなり是等を以て知るべし多味の多味の
 功あり製藥の製法の功あり香川氏の如く一概あり
 云ひしは又藥の大劑に功あり小劑に功ありと云ふ
 何れ是亦是とて從ひしは藥の性力を量り病の輕
 重は從ひ施すと云ふべし病ふよるとい難を割くに牛力

成用也との誤りも何れも只方よの古今も多味單
味分ちる功何の方成撰に取し醫理を以て病症を推
— 求め施治成宗とす —

問病名の如何 答曰其實無きもの可あり已に寒
小傷らるもの成傷寒と名つる食小傷らるもの成食
傷と名つるの類あり名あつて病有る何れ病有る後
名の設きたるものなり祛きとも其名目何の故と云ふ分
ちもあつて素人の耳に馴れ来ると成るもの也一
は明らかされい患者の心成安んずると何れも只願くは
病名より病因を分ち條理を知り成肝要とす
勿論五行家所説の病因大抵無益のため此多きなり

此病の惡血より来り此病の壞液より因り此患の粘液より
起るものと云ふ所は意成用ひ能是成察し早く其物成
祛き去り氣血の流行常に復して清潔なるやうに治を施
せり此條理不立して名を主張して多端ありて療
治のありざるものなり成を漢醫のなりしりて病門を
多く分ち後世の醫者は疑惑し療治の條理立す
く成誤るもの多し已に男子の下疳淋病婦人の帶下皆
龍膽瀉肝湯を通用す尤其症の輕重は從ひ方を轉す
るに成と云ふ藥性の同一筋の物成主と云ふしあれ等
此病同因あり其療法一條理なきものなり古人を心何れ人
は問ふ此所不至るものなり成當世の醫家其

本源に暗く患者に對して自らも不決する事或痰を
了癩なり肝經の濕熱なりなど能採小説の患者の何
の辨へなく此説を聞か尤と心得く病狀託し治を受く
なへふ如此き世の風俗なり其證は何まの場所も
久年此漏瘡を氣腫と名け治し難き舌瘡を舌疽と
名つてまゝ患者意安んして落し着するの類なり又
陰莖小發する瘡はぬ何採症より下疳と心得肛門小
發する瘡はぬ何採症より痔と心得く治狀施し患
者誤るる多し是等即病名を主とするより此誤
りなり醫者は是れ恥ともせず恬然として已ら未熟省
しして命なりとせふ何の心をや又女疝と云ふ名本州

より見出したり酸瘡といふ病名何の書あり見出したり
と自負する醫者も何れも是等の博覧は誇りてよく治
療に實用あり立す知らざる可濟事なり畢竟名の無益の
ものあるまじと名るけまは俗物小對して事不決り故なり
良工ともんと欲するもの偏に病因推し求むる
要とするなり其實の所を物あたへ古も今も何所乃
國めても人間と云ふものは上天子より下萬民に至るまで
男女の外別種あり然るに上下を分ち夫れ此位階或
立又其人に名を命し四民の名目を定しその
し人たるを同し人なり但貴賤尊卑の名目分ち
まゝなり然るも其人の性質小賢愚あり上り下り

あれ哉指揮する人其諸民の利鈍邪正を察し悪人を
去善人を擧ふと或第一の務とす醫者もその如く名小
拘つて病因此善惡輕重或察し惡きものを除き重に
め或輕く志むるの要或專務とすなり然れども前に
述べたる如く病名或知れども是は患者小對して其氣
を安んずると或は氣滯とす病治し終る
不益のめれども舊習なまき今更改めし此亦
一通アハハの如くたるは躰小在官の醫の是を知れん不
學の譏りを得る事あり心はなきの一なる
問其他醫の要猶有や 曰あり總く患者を療するに
其扱方に意或用也なきや あり病少年の時田中俊庵と

いふ老醫にあり其人の曰都下にて醫の業或立んと
し羽二重摩き木綿摩れとのやとに意或用也なりと
教へしや其頃は年若くしての笑しき採り聞過
せし老に従ひ多く此病者或療もふ及く是浮する
言もあり或は知まざる是は貴賤老少其人の平生と性
稟強弱と或思量し其程に應ずるやに取扱ある
しとのりなりとらん也已小阿蘭とす其意或説示し
置たり凡老人小兒の痛苦に堪へ忍事或はるものなり
故に假令に外症ありて膏藥を貼るや粘り氣強きは
貼換の時放まると惱むなり常は心ききりあり内藥
もその如く辛に過ると苦きいふは採りはるものなり

婦人強ふ多し一與ふとも調合と服法とふ意成用由なりとあり
 然るに強く用ふるときは害成招く事のあるものなり又飲食に
 至るに強ふ意成用ひ只消化一易き成進むなり粘稠小
 して硬く堅鞭此物の必ず害あり阿蘭より消化を四段に
 説く既に其説成譯文するに曰く凡人飲食益有四化一曰
 刀化俎砧宰割二曰火化烹煮熟爛三曰口化細嚼緩嚥
 四曰胃化蒸變傳送云腹中に入らるる腐熟せざる前に
 先三化するなりとあり如許すまの腸胃成勞せしめて化す
 まるなるも又食生食冷大嚼急嚥則腸胃受傷と説く
 此等此理成よく辨へ知るべき事なり假令はたと者まの
 風味よく煮過せば強くして風味不美と云ふ物の類は

腹中へ入て自然の温氣をばく脹まひるるも強く
 なり消化もよく成るなり生さる所の津液は
 粘凝して體を養ふも利あり甚く害ありものなり其
 他一切乾枯せるもの皆あれと同し如此るも急病者に
 はよくけく意成細小用ひよく進むべきなり又盡く
 淡薄の物の宜しき油膩の物の悪きと云ふは醫者の
 ものなるを斟酌し能く病者の虚實成診察し實
 家より淡薄なる物成與へ虚家より油膩なる物成進め其
 程能き成宜しきなり譬へ鳥獸草木成養ふも同し
 養ひよる枯りし死りし足らざるも亦同し只過不及
 なる成要しきなり又性油膩なりて虚成補ふと毒

成増との別ありあり假令鮪絡松魚の類の毒有る故に
冬日煮過して氷らす是性熱有毒なる故あり又雞
卵鰻鱺の類の油膩のものなきこと其油脂美薄し
體を養ふに利あり如此の事は意て用ひ審み病者
小與ふるも且醫治業とするもの一切の飲料食糧は
其製法と調理の原と成常に知究むるべきなり其は
かくして製して何の物か作るべきことあり
を知らざるを妄ふ人小對して禁好は沙汰と
なるひくこと已小味淋酒の常の酒より毒なりと心
得熱酒の毒ありて冷酒の無毒と云ふ様なる事
ものなりねん情も古今あり好嗜物も變異あり昔し

は食せざるものも今も嗜む又食物の調理の宜し
從より猶藥の配劑は是亦古と今と異なる多し此故
も病も弱る若年の時見ざる此症近時多く見當るは
あれ彼古今人情變態動作食物の變ふよりて新病も發
するものことあり已小痘瘡黴毒古書ふること後
世盛に行はるる類あり近頃新渡の瘍醫大全
も江蘇揚州府江甘議三邑婦女脚氣門と別一
症を擧げ是康熙五十年間のものことと云ふ
ぬ病あり此類の人情も古とは異なりて食物の變ふもの
氣滯常に多く血液不潔發生して流利失常よる來るな
るなりぬはるる也也醫の業を必然一定と決する事甚

た猶ききりてんりありあは説多硝子と水晶と見見く
筆も口も及わすし習熟ふあつされ其妙處は
多し此故に一人も多病者を取扱ひ功を積る上な
らる鍊熟するの事難しと知まわつてあふより
富貴貧賤の差別を託せられし患者あつた力の及ん
ばと深切小療をふやくは數人小療を問ふは
自然と言外の意味も生得の戈不戈相應に熟しは
ものともなり富貴貧賤の天より安排しあふものな
きは私も成るものもあつたは凡庸の人のみ富貴
榮達に心迷ひ我職事も志薄く生涯阿諛牟利のため
に奔走し無益小心地で勞する徒もあつた如此類の逆を

士君子の齒牙に掛るるきふあつた凡醫酉業を立んと
欲する人の第一廉恥の心を失ふ其業の寸陰の間もを
油断せし一人もを託せられし患者あつた我妻子の
煩ふやうに思ひ深く慮りて親切に治す施すし假令
如何振るる貧賤の者あつても高官富豪の人もを療治は
同しやうに心は必しも志は二つもあつたは幾重も治療
の要處は自得し條理の立たる治術は施んとあつた希し
翁の壯年の頃よりあつたは此所に意は注ぎ勉勵せし故
今に其事足らたうあつたはあつた若き時は比すれあ
しは明らふ成るるあつたは此年月権門富
貴の家へ出入する故利達は得たあつたは賤む輩もあ

及又妓家俳優の家へも招き来りまはれ往く有り也
 志操の立ぬ男と謗る族も何れも一しと公翁を決く頓着
 せず招けを至り託すれ療治す底心名利の為にする志
 あり初を權貴の人よりも病愈後再ひ出入せ固よ
 り此意されと年始暑寒等の無益なる事よは奔走せし
 目當とすす所一人ありとも病人多く取扱療治の機會
 哉自得せんと欲しそなる是は父祖より受継ぎ家業
 ありたるたけ瑕をのけす代々恩澤哉蒙りし
 君なきは有り時其刻の用にちんと思ふ斗ふたり
 醫者の恥業の拙きと云りより外に恥なる事ありなき
 中なきとあり又病用の外諸侯縉紳の門より出入せ

あり若其徳方々の恩遇重なりまは報する命ニツ持
 されたり凡夫浅猿さば若し高貴の惠愛厚けを
 はまに迷ひて我君に二心哉生せんを深く恐れ
 慎むるなり又富貴の人と常に親しく交さるは是れ
 凡心より自ら諂の情も起らんと思ひ無用の事よは
 漫りふ出入せず此等の翁病家取扱の微意あり
 問子務むる所已お如斯なる漸々ふして今其業成り
 たりや 曰否醫の生涯の業よりして迎も上り名人も至
 らざるものと見ゆ已ま上りと思はるや下りなるの兆と
 志るなり是の翁懺悔物語なり聞し召はるる
 事も云ひしごとく我身醫家の生ま是れ以て業を立さ

まこと一日の世を處ふことのたかりのとき身なりぬれぬ
 生得不才の愚なるのく醫者と云ふ程の醫者の成へるは
 と自省の願ふせめく一病もては囊中乃物探探の形
 やうにありたると
 君は祖先の分ちたりと云ひ
 何物も難治の症をして人の難治するものと彼是慮を
 するは懲毒ほとせお多く然も難治するて人の苦惱
 するものなり是をよく療むる人の世の中におきて
 心付是れ治せんといふ目當とせめく此一病は能療
 せんといふ念と少壯の時の此病は功者なりと云ふ人
 然聞は必尋求め其人は從ひ方術を學び習ひ毎時を
 其患者に施すは我意に適するやうに効をばはると云ふ

迎ふ人力のいふは其必驗の妙處は得らるると思
 ひ少年の愚昧より神明の冥助をばはんと欲し菅廟
 は一日詣り一心に祈誓せしうといふ元より醫事を知り
 強ふべき理をばはれと祈りし其驗あり只日夜此事
 此心頭を志まはるるや或夜の夢想に天靈蓋紅
 花等分り為末與ふまの奇功ありと云ふ一方を授けり
 といふ阿まとも是も凡心より出する夢想をばはれと施し
 試みるは寸効あり然も我學ぶ所の是らざる故ある
 及しと覺悟を志し古今の醫書を見盡さんには
 ばと憤發し數百部の書は涉獵せんと志し立たれぬ
 生來の情夫より精力も薄はれたるをばはれしはひせめて

はあつて志す徴毒此方論をのりも讀盡人と意を決し
家藏此書いつふ及とひ他人の秘藏せし珍書すもも力
のおよふたもひ備り集め其論と方とを盡く抜萃し
既に數百方其揖録し患者に逢毎に其方中を擇
ひ取り症小從ひ施し試みしは是を百發百中乃
神妙なる方と名なり其後阿蘭醫方此諸書に涉り
其諸方此中試同し施し試みにさせるかとりめると
兎角もる内に年々虚名成得く病客の日々月々に多
毎歳千人餘りも療治するうちに七八百の梅毒家なる
如斯事にして四五十年の月日成強きは九此病
を療せしむる數萬成以て數ふたり今年七十や

いふも及くともいふも百全の所をさるるいふれは患者の
不慎とさるる但し療治此拙さるる益難治とさる成知
りたるまで少く若年のに少くも變るとなり一病さ
然り況や百病をや元來身此短才より此とたふれと醫
小熟するをさふるの至り難きものと翁の思ふるなり
ある人の成るものも知れぬ卒示しし成るやつきは
決り此道さるるし脚り成容易なり成るのやうに
等閑小免や人の恐るる非なり又此よりの説話
あり序さるる語るなり總く彼大洋を乗る船頭
上中下の三等ありといふ若し洋中難風に逢ふるは
下等の船頭の其面人色さく只恐懼しし脚腰立ち嗟き

悲しむるものあり物を用ゐたる事あり中等の船頭の
 此難風難逃と知るとは艦舵を擲ち晏然として必死を
 覚悟しゆく死に於て然りとるり上等の船頭の初より一
 言のこゝも之の救ふべき程の心を碎きも然る一己も逃
 まさるるものあり至るる船と共に覆没せるとるり醫者
 業を為さるるものも此境地あり少く難病とある時他へ
 譲りて療治せず治し易き症の療して一日を渉り
 口残糊する醫者何れも如此の生涯其業の上達する
 はなきものなりされ下等とある一又早く難症と
 知り其上より工夫せし轉方小心残竭する醫者の難症
 は救ひばるるものなりされ中等とある一其上

等あるものの難治のめりなり知るる事あり然るは患者の
 息断へ脈も絶するまで是非小救んと意を潜め思残
 焦し心力残盡して治残施するものなり如此すまは百
 一の利をばるる救ひ早するものなり何れものなり死ぬ
 りてはつて残念のなきやうにありたりたきものなり
 然る事自ら上るものなり他醫者へを譲らす絶
 命するまで薬を與へ外も醫者のなきやうに心中
 にく簡し安んじて療治するものなりされ我慢の甚し
 きもの不遜とも不慈とも云ふる尤可憎の志あり
 一度も二度も辭退すといへども病家の信任甚し強
 く託するものなり及るるたまた上等船頭の意の如く

其時其藩醫栗山幸庵招に應じて居りて患
 者の状さしつゝ大患と見えぬ然も其苦
 る人との終に難症とも申さんとあせり其趣幸庵に
 告ぐ幸庵聞く予めさあそ思ひ決るるり何れは
 あり老兄をも招きたり自ら難治とあり一兄も治を
 託せんとするの禮ふ何れは難きとも治を盡すの醫の
 道なり此後をも屢々玉趾を勞まへり力成添へ難きもの
 と申たり此一言假初のやうなれと醫たる人の道を知
 りたる云葉るる一已に難治と知りて人は託せ
 るの實も非禮なりすすり關西よりは栗山幸庵と稱

せらまじり程の人物なり今の泉下の客となつたまきとも
 りに觸まるとは思ひ出して感を生ずると志んくあり
 あり或は世醫を初より病の輕重辨へすうやくと療
 治し已に難症に極り治盡すに至りて俄に巧言を以て
 辭退し無理も他へ譲り自ら長持して殺せりと人お評
 せられ汚名蒙らんと或は恐き強て免る醫者をも何りや
 穢しき心もての中々真の醫業の立ち難きありあり
 います重み至らざる初發に此症後々の難症とならん其
 明め察し或は下さしつゝ他に譲るる格別の事ある
 及し蓋漢土の古の醫術を疾醫瘍醫の二科に分つ後
 世に至りて十三科或九科に分つとにあらざり阿蘭もては

醫哉内外二科に分ち外よりするもの眼科口科まで
外科の任と為と聞ゆ其熟練の者へ許して内外諸科
か好む志むるとあり故に一家に為して書を撰するの
は各二科の著述あり和漢より右の如く専門を
立多分脩りせぬるなり翁の傷醫の家に生を幼より
此事を專一ふ心の多本業の治術の數年勉強し
阿蘭醫術を精究するに從ひ金瘡折傷等の外傷の
餘瘍醫家の取扱ふ病患悉く皆内に根さして外に發
するもの哉知まり是故に外症を療するに毎に内藥を
急與ふされしよりして輕き感冒の疾の相識の間は
折に觸るる内藥の與へるものあり

君もも此事知るる召し給ひ疾醫相兼よとの命を蒙
りし如くは是の本業を何とせざるや固く辭し奉りたり
其意何なるは傷寒温疫の類より産婦痘疹等全く
疾醫の業に係るの書如く讀むるに其讀書
の上より随分明らめらるる採るべきものあり
す此故深く意を注ぐに殊に自ら諸人を療して其諸症
を愈されし彼治療の機會風味塩梅も免えず所謂
書哉以て馬哉御まの道理より恐らく人哉誤る事
あり何らんと思量して辭し奉りしなり況眼科口
科の業に猶更の事なり醫者なれども已に熟せぬる
哉何あても引受療治すべき事あり

醫ありて内外兼療するき症哉今時博覧の良工あり
 と呼わり疾醫家より免や角評論する哉聞くふ口尚
 乳臭實に兒童の言と不堪聞事多し我より彼をん
 ぶと許の如くあるまじく又彼より我をんるもの同くか
 自ら習熟せざる事哉ありて患者哉多く誤り且識者の
 ために笑ひまじきありあはれも恥しむ此類の病は皆辭
 して下さるは是翁の志を立し一ツなりなき端なき長
 物結むす小燈の油の絶えりや影子の姿貌を
 見えざるの説話も是と共に止め

右數條を翁が常に時あはれ見孫及門弟子小語ら
 むと思ふりせざるは近時の衰朽して萬事

ふ懶く閑あまきと親友と交けし互に妄語妄
 答し無事に日を消する哉以て樂とい偶我
 業哉慕ふ人來り問と何事と其才も從ひ其
 力に應し答るもの意哉盡さるるものなり古
 語ふ所謂師の鐘の如しと大鳴小鳴の其撞く人の
 力も由ふまじきあり自序ある速しと此項不意に
 閑哉得る無為の餘りはく我身の上を顧ふ小
 經歷したる歲月とせふ精氣も衰へ今もて見え
 しものみならずに忘るるちあなり行ぬ古に七十
 ふして致事と何家の物の用も立さる年あるまじ
 なるしこれを以て想へる老老せんり恐らるは

久しうなるものらひ若しつゝ時節ふらふらん又
此閑暇をゆるんと猶ほのべし因て自問自答哉
たし筆を任せし書はら神々此一書とあり
たるあり此彼老人八變のつゝ記遠不記近と
所より出する事のつゝ皆心ふ浮きたるを
を随意に書出せるまてなま此中より善きと惡
きとあつゝ必しみるまて出して他人に見せ
志むるものれ若身後に遺りありて讀者あ
るま多し其冗長は堪わらざる固より
書不盡言言不盡意とて委し其意味のつゝ
あつゝ猶ほ不學此翁のまは進を漢文と

書取らば幸ふ我 邦のま業は以てを侍る
風俗も其平話のまて國字を以て書著し置る
のゝ但我徒の子弟才不才の論さくまき讀む
便して早く此意は會得せしめんと老婆心は
はさりゆく子孫門人の子弟に至り醫業を立んと
あふ人のまて其の煩わしき堪へ忍び是を讀
むは目のつゝ翁は左右のつゝ直に説話を
聞くと同一つゝ能此書の意味は會通せば
少し志業の一助ふをたるとあつゝ眼鏡の力
は借し燈をゆけ其下ふし記し置るなり

形影夜話卷下終

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.



杉田伯元校正

文化七年庚午十一月刻成

塙東居藏版



